



Japan Optometric Association News

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会会報

編集発行 「認定眼鏡士®」を認定・教育する唯一の公益社団法人
公益社団法人 日本眼鏡技術者協会

発行人 津田節哉 編集人 辻 戦三

〒 532-0003 大阪府大阪市淀川区宮原1-2-6 新大阪橋本ビル9F

TEL 06-4807-5070 FAX 06-4807-5009 <http://www.megane-joa.or.jp>

E-Mail joa@maple.ocn.ne.jp

Vol.
149
JOA News 2015年12月号

CONTENTS

●巻頭言

- 「本協会の現在－財務の見地から－」…………… 中島能澄財務部長 …… 2
「眼鏡技術者の視点に立つ」…………… 片山敬三会員組織部長 …… 4
ブロック会議…………… 5

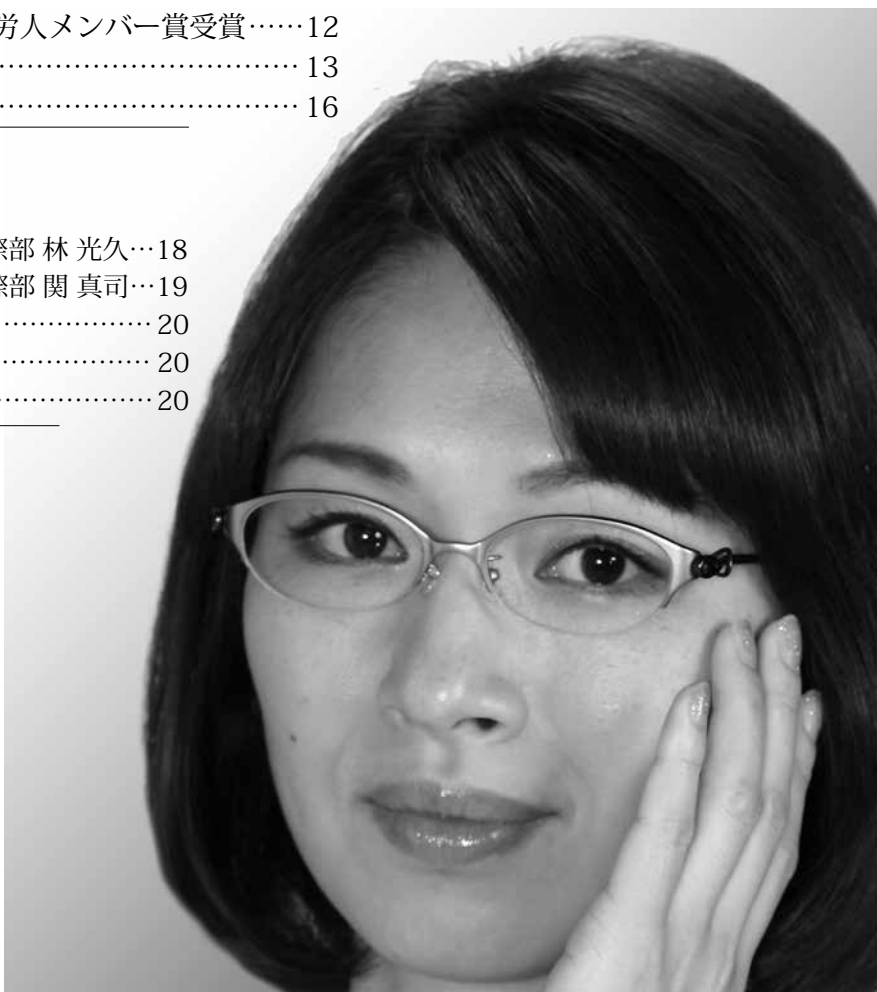
●誌上眼鏡学「立体感覚とコントラスト」…………… 内田 豪専任講師 …… 6

●トピックス

- 第 51 回日本眼光学学会 参加印象記…………… 金子 弘 WOC 校長 …… 9
眼鏡学会オープンセミナー報告
最新の累進眼鏡フィッティング…………… 木方伸一郎日本眼鏡学会 部会長………… 10
金井国際部長が APCO 功労人メンバー賞受賞………… 12
支部活動報告…………… 13
理事会・議事報告…………… 16

●各部報告

- 国際部
WCO 参加報告…………… 国際部 林 光久… 18
APOC・APOC…………… 国際部 関 真司… 19
組織活性化特別委員会…………… 20
広報部・事務局より…………… 20
編集後記…………… 20





本協会の現在 — 財務の見地から —

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会副会長
財務部長 中島 能澄

2011年4月（平成23年）、公益社団法人・日本眼鏡技術者協会への移行から4年の現在、本協会がどのような状況にあるのかを主に財務の面からご報告し、将来に向けての課題を考える参考にさせていただきたいと思います。

1. 財務から見た現状

数字をお示しします。04年度と10年度（11年3月末、現法人スタート時の状態）および14年度の会員数、収支、財産など、決算の一部です。

①会員数および認定眼鏡士数の推移

年度	04年度 (H16年度)	10年度 (H22年度)	14年度 14/04 (H26年度)
会員数	7,930	6,923	6,195 — 21.9%
認定眼鏡士数	8,841	7,529	7,172 — 18.9%

会員、認定眼鏡士とも減少傾向にあります。会員の減少率は単純平均約2.5%で、年々その率は少しずつ上昇しています。ここには出てきませんが、会員外認定眼鏡士は増加しています。

その結果、総認定眼鏡士は減少し、同時に会員外認定眼鏡士数の割合が微増しています。（15/09現在、会員認定眼鏡士：会員外認定眼鏡士＝5,273：1,854＝74%：26%）

認定眼鏡士構成比

（2015.9.30現在。性別、年齢の不明の方を省略していますので、合計数は合いません。また、集計日が違うこと、くくり方が異なることから上記と数が一致しません）

	年齢	～30	31～40	41～50	51～60	61～70	(66～70*)	71～80	81～	計
会員	男性	174	819	1,447	1,244	1,086	(485)	440	80	5,292
	女性	52	153	188	131	105	(55)	29	6	664
	計	226	973	1,635	1,376	1,191	(540*)	470	86	5,961
会員外	男性	136	363	524	464	114	(16)	9	3	1,599
	女性	77	110	80	36	6	(2)	1	1	325
	計	213	475	606	500	120	(18*)	10	4	1,928
合計	男性	310	1,182	1,971	1,708	1,200	(501)	449	83	6,891
	女性	129	263	268	167	111	(57)	30	7	989
	計	439	1,448	2,241	1,876	1,311	(558*)	480	90	7,889

会員等のボリュームゾーンは団塊世代にあると漠然と思っていましたが、団塊世代（*のところ）は7.1%、（団塊世代も含め）それ以上の年齢の会員は14.3%です。若い世代の認定眼鏡士が思ったより

多いのです。50歳までが52%以上、60歳までなら76%以上になります。

女性認定眼鏡士の割合は、上で見るように、全体で12.5%です。

②収支の推移（単位：円）

	04 年度 (H.16)	10 年度 (H.22)	14 年度 14/04 (H.26)
収入	10,957 万	10,847 万	10,099 万－ 7.8%
支出	12,511 万	12,408 万	10,447 万－ 16.5%
収支差	－ 1,554 万	－ 1,561 万	－ 348 万
前年度繰越	4,690 万	4,058 万	2,417 万－ 48.5%
当年度繰越	3,136 万	2,498 万	2,069 万－ 34.0%
正味財産	7,048 万	6,601 万	6,291 万－ 10.7%

総収入は、ほぼ会員・認定眼鏡士の減少に見合っ
て減少しています。また総支出もそれに合わせて減
少しています。

公益法人へ移行直後の 11 年～ 12 年は 2 期連続
の剰余となりましたが、これを内閣府から指摘され
て公益事業を拡大させ、13 年には過去 3 年累計で
の収支をバランスさせました。

正味財産の減少は、旧法人時の指導が大きく影響
しています（というよりも、そうなるよう指導され
たのです）。現法人移行後も、財務規模、繰越額、
正味財産とも、減少しつつあります。

つまり、a. 収入減は会員の減少が主な理由であ
ること、b. 支出増（または減らせないこと）およ
び財産の減少は所管省府の指導に大きく左右される
こと、の 2 点がわかります。

2. 今後の推移

上記の傾向が続く（状況が変わらない）として、
2020 年での推移予想は次のようになります。

a. 認定眼鏡士の減少率は、会員の減少率より低
いと推察できます。会員数は 5,500 名を割ること
になりそうです。認定眼鏡士数は 7,000 名弱くら
いになりそうです。以上の結果から、会員外認定眼
鏡士が（14 年度 26%から 20 年度 30%～ 35%く
らいまで）相対的に増加していくと推定。本来、会
員外認定眼鏡士は状況に対し敏感に反応するファク
ターと考えられますから、不確定要素が増加します。

b. 財政規模 10%以上縮小しそうです。

c. 正味財産 5,300 ～ 5,000 万くらいまで減
少すると考えられます。短期的には流動性資金（活
動資金）の不足をきたすこともありそうです。

認定眼鏡士ではない本協会会員は 12%程度おら
れますが、この部分は通減していくものと思います。

3. 会員について

したがって、従来からの方針通り、会員＝認定眼鏡
士となっていくものと考えられます。

新たな認定眼鏡士の供給源は、①眼鏡専門学校の
通学課程の卒業生。②眼鏡専門学校の通信課程の
卒業生のうち一定の条件を満たした上で SS 級認定
試験に合格した者。③ SS 級認定試験合格者の 3 系
列あります。実績では直近 10 年で年間 200 名強、
直近 5 年で約 180 名が新規登録されています。

認定眼鏡士全体では、年間約 200 名ずつ減少し
ていますから、認定眼鏡士から脱落していく人数は
年間約 400 名です。新たな被認定者を増やすこと
は、（認定基準をゆるめない限り）期待できません
から、新規認定眼鏡士はこれからも 200 名前後で
推移していくと思います。

4. 公益法人としての財務上の制度的制約について

①公益目的の項目ごとでの収支の均衡を求められ
ています。簡単に言うと、その目的のために得た収
入はその目的のために剰余無く支出しなさい、とい
うことです。その項として、次の 2 点が求められま
す。

a.) その目的のために得た収入はその目的のため
に使いきりなさい。

b.) 他の目的への支出（流用）は認めません。

②組織全体での収支でも収支の均衡を求められて
います。単年度ごとに厳しくその原則が適用される
わけではないのですが、数年連続して剰余が続く（言
い換えると、組織の財産が増え続ける）ことは、公
益法人制度の趣旨に反すると指導を受けました。

以上のことから、将来に備えて財務体制を余裕の
あるものにしようという施策をとることはとてもむ
ずかしい、と言わざるを得ません。

4. 最後に

以上、本協会の現状を書いてきました。次は、な
ぜそうなっているのか、そしてこれからどうしてい
くか、考えていかなければなりません。それは財務
の範囲を超えることであり、本協会全体の問題です。
活発な議論を期待します。



眼鏡技術者の視点に立つ

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会副会長
会員組織部長 片山 敬三

（公社）日本眼鏡技術者協会の皆様には、常日頃本協会のさまざまな事業にご協力いただきましてありがとうございます。

2013年の秋ごろから景気が回復しつつあるように思われましたが、翌年4月に消費税が5%から8%に上がり、その結果日本経済には大きな打撃となりました。我々の眼鏡小売業界も例外ではなく、大変厳しい状況になっております。一日も早い景気回復を望むばかりであります。

規制緩和と法制化

今、会員の皆様が最も関心を持たれていることは、眼鏡技術者（認定眼鏡士）の法制化運動はどこまで進んでいるかということではないでしょうか。

関係官庁の見解では、規制を緩和している我が国では行政立法では難しく、今後、議員立法で進めていくこととなりますが、できるだけ早期の段階で資格制度の実現を達成するよう、あらゆる覚悟が、眼鏡業界全体に強く求められています。

関係官庁および議員の先生方ならびに眼科医会の先生などとは継続して折衝を行っておりますが、一番大切なことは、法制化について眼鏡技術者が生活者の信頼を得ることではないでしょうか。

それには、しっかりした技術とハイレベルの知識を持った技術者が、お客様に満足していただけるメガネを製作・販売することにつきますと思います。

ブロック会議

毎年1回実施される、10ブロックの半分以上、北から南まで出席させていただいておりますが、5～6年前までは、全支部長さん揃って会議が開かれることは少なかったように思います。どこかの支部長さんが欠席されていたものです。しかし今日では全支部長さんの出席に、ブロックによっては、青年部・女性部の方々が出席され、今までにない活発な意見交換が行われるになりました。

ブロック会議を通じて、支部活動、特にイベントの企画・実施方法と認定眼鏡士のPRなど、建設的なご意見が出るようになったことは喜ばしいことです。

インディビジュアルレンズ

今、日本では高齢化が進んでいます。「眼鏡DB 2015」によると年間にメガネを購入される人は1800万人いるといわれていて、その53%が45歳以上です。

ここ1～2年話題になっている「インディビジュアルレンズ」は、従来のレンズに比べ素晴らしい機能を持っていますが、この優れたレンズを生かすのも、我々小売店の高度な技術を持った眼鏡技術者（認定眼鏡士）でなければなりません。そのためにも本協会の生涯教育講習会や各支部および眼鏡学校やメーカーが実施しております認定講習会に積極的に参加してください。

そして、皆様のスキルアップに努めてください。皆様のご協力をお願いします。

ブロック会議

九州

10月28日に九州ブロック会議が那覇市（沖縄県）にて、野口ブロック長以下各支部の関係者、本部からは津田会長以下3名の合計15名（内、青年層2名）の出席で開催された。津田会長はあいさつおよび議論の中で、眼鏡技術者国家資格推進機構の最近の活動状況を詳細に報告した。議事としては、各支部の活動報告では、支部総会を生涯教育と同日に開催したい件や各県での眼科医会との交流、宮崎県支部で初めて単独で生涯教育を実施する件などが報告され、また本部事務局からは上期事業／決算などの報告を行った。次年度のブロック会議は佐賀県での開催となる。ブロック会議終了後は懇親会が開かれ、種々の意見交換をする中で懇親を深めた。

（九州ブロック会議風景）



東海

11月18日に東海ブロック会議が鳥羽（三重県）にて、平岩ブロック長以下各支部の関係者、本部からは津田会長以下3名の合計17名の出席で開催された。津田会長はあいさつおよび議論の中で、眼鏡技術者国家資格推進機構の最近の活動状況を詳細に報告した。議事としては、各支部の支部総会資料に基づいて生涯教育や支部総会をはじめとする各種の活動報告がなされ、また本部事務局からは上期事業／決算などの報告を行った。次年度のブロック会議は愛知県での開催となる。ブロック会議終了後は懇親会が開かれ、種々の意見交換をする中で懇親を深めた。

（東海ブロック会議風景）



北陸

12月2日に北陸ブロック会議が加賀市（石川県）にて、ブロックおよび支部の関係者、本部からは津田会長以下3名の合計15名（内、青年層2名）の出席で開催された。津田会長はあいさつおよび議論の中で、眼鏡技術者国家資格推進機構の最近の活動状況を詳細に報告した。議事としては、各支部の支部総会資料に基づいて生涯教育や支部総会、支部独自の新聞広告やパンフレット・販促グッズなどの各種の活動報告がなされ、また本部事務局からは上期事業／決算などの報告を行った。また片岡（前）ブロック長の退任を受けて、ブロック長には西田芳夫氏が、また副ブロック長には川倉敏信氏が選出された。次年度のブロック会議は福井県での開催となる。ブロック会議終了後は懇親会が開かれ、種々の意見交換をする中で懇親を深めた。

（北陸ブロック会議風景）



立体感覚とコントラストの知識を整理してみよう

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会

専任講師 内田 豪

皆さんお元気ですか。

生涯教育でお世話になっている内田でございます。今回、「誌上眼鏡学：立体感覚とコントラスト」として眼鏡調整（製）に求められる眼鏡学的蘊蓄（ウンチク）にチャレンジしてみました。特に最近はインディビジュアルレンズなる単語が目立ちますが、聞くところによると欧州ドイツでは累進屈折力レンズに於けるインディビジュアルレンズが占める割合は 40% 程度との事です。皆さん衆知の如く、このレンズは手強くて、調製（整）に高度な知識技能が求められます。欧米では眼の特性を収差計で分析し眼鏡調製（整）を行う時代になってきております。収差計は高機能ですが使いこなす技量もそれなりに求められます。詰まるところ、眼鏡技術者も時代変化に合わせて様々な知識技量を研鑽する必要性に商品側（レンズ）から求められてきていると理解しています。今回は両眼視の中で立体感覚、レンズや眼の特性を論じるところでコントラスト関連に関して

解説を試みます。

図-1 は影と立体感に関して人の感じ方を示したものです。図版を見て皆さんはどのように感じますでしょうか。円の上方下方とそれぞれ明暗が異なる図版を並べていますが、円の下方が暗い図版の方が何となく中心が手前にあるように見えませんか。人の 3 次元の物体に関する感覚は環境に影響しやすいといわれています。

（マフィン＝お菓子：パン＝皿）

マフィン・パンと 3D

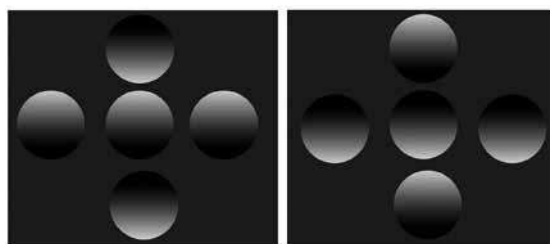


図 -1

著作者プロフィール

現 職

- ・早稲田眼鏡学校（現 東京眼鏡専門学校）にて眼鏡光学・屈折検査・商品知識を中心に 19 年間教鞭を執る。
- ・大規模眼鏡専門店、小規模兼業店、眼科検査主任として勤務後、「めがね技術コンサルタント」として独立。
- ・2011 年より東京眼鏡専門学校で非常勤講師として「眼鏡店実務・測定全般」の教鞭を執る。

活 動

- ・中国瀋陽何氏大学・天津医科大学・温州医学院にて眼鏡技術講演
- ・AMDA モンゴル国際医療奉仕団 2010・2011 眼鏡技術講習
- ・IOFT・IMF など展示会セミナー技術講演、メーカー展示会セミナーなど

主な著書・論文

- ・眼鏡学ハンドブック・生涯教育テキスト共著



影と三次元、奥行きなどに関してはレオナルド・ダ・ビンチも色々と書き残しているようです。絵画に於いて輪郭、光、影、色彩これらを用いて完璧に仕上げて自然界にある物体と同様な奥行きを示すことが出来ない。と記し、更に両眼、片眼で見える風景の違いに関して観察し述べています。影の出来る位置と物体の置かれている位置の相違、なんだか難しい話題になってきましたね。では、これをご覧ください。(図-2 & 図-3)

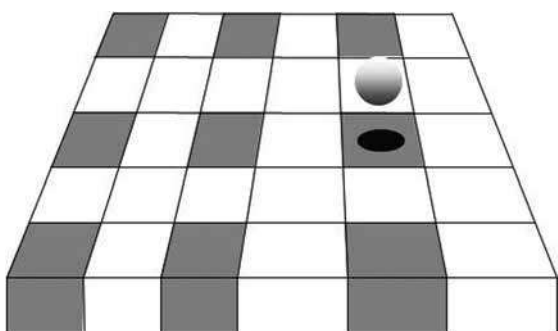


図-2

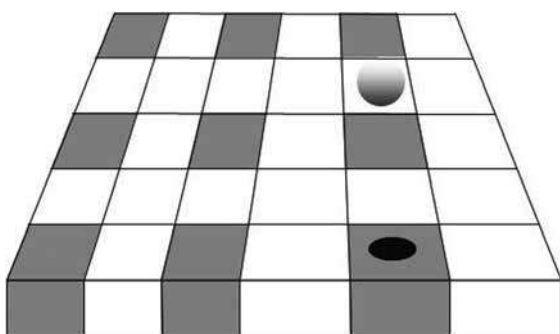


図-3

盤の上に置かれたボールです。同じ位置にあるボールでも影の位置を変えると、何となく盤の上にあるボールの盤からの高さが異なって来ます。

私たち眼鏡技術者は普段、眼鏡店の現場で何気なく奥行き知覚の測定で深径覚をチェックしていますが奥行き三次元の見え方、表現の方法などは画家をはじめ色々な方が考え研究していたようです。中でもダビンチは透明な空気の色を遠近感覚の表現に取り入れ、これを空気遠近法としたことは生涯教育でも解説しました。ダ・ビンチの奥行き感覚の説明で

致命的(恐れ多いが)なのは光学だけで3次元の感覚、いわゆる立体視を説明しようとしたことだそうです。この問題を解決するには200年の時間が必要でした。

さて、200年後。優れた絵画は片眼で見ると本物と見間違えることがあるが、両眼で見ると本物の場合は眼の網膜に異なったイメージが映ることに言及した人が現れました。現代の眼鏡技術者であれば、視差による像の違いと気がつく内容です。図-4に示しましたが、この点に言及した人はチャールズ・ホイットストーンです。電気を勉強した人はブリッジ回路でその名前を聞いたことがあると思います。

三次元と感覚



図-4

彼はこうした原理を元に1839年ステレオスコープを作り上げました。残念ながらホイットストーンは視差によって異なる像の重ね合わせで奥行きが感じられる事が理解出来ても眼や脳がどのように認識して理解しているかなど詳細は説明が出来なかったようです。我々が「立体視」として理解している現象は1960年代近くまでその詳細がわからなかったようです。さて、ここで我々眼鏡技術者が良く知っている一人の技術者が登場します。

ベラ・ユレシュです。

そんな人は知らない!とっている貴方。では図-5をご覧ください。

ランダムドットです。諸般の事情でアメリカに亡命したユレシュはベル研究所でレーダーの技術者として研究を行っていたそうです。彼は「偵察飛行でカモフラージュされた物体を見破る為に二つの異なる位置で撮影された偵察飛行写真を利用する事で解決する」と提唱しました。両眼立体視機能に関して



図-5

理論的に研究した内容を実証するためにランダムドット・ステレオグラムを開発しました。皆さんは両眼視の勉強で同時視・融像・立体視を勉強したと思いますし、(公社)日本眼鏡技術者協会の生涯教育でも度々登場しています。視差を利用して奥行き知覚を認識する動物は比較的多いようです。昆虫でもカマキリが捕食する際に頭を左右に振るのは視差によって捕食者までの距離を測っていると言われてい

ます。他方、両眼立体視機能を有する動物は一部の霊長類だけに与えられた特別な機能らしいといわれています。この特別な機能、両眼立体視機能、眼鏡調整(製)に応用しない手は先人の研究者に失礼というか、特別に与えられた機能を活かしていない事になってしまいます。

○装用値で立体視チェックしてみよう

図-6に測定室で行われる立体視視標の様子を示しました。この場合、視差の大きな視標ほど浮き上がり(沈み込み)が大きくなりますが、大切なことは量の大小では無く、どの程度の視差まで前後感覚が判別できるか。これをチェックすることです。この量はPDにも関係します。一般的にはPDが大きいほど前後感覚が細かく判断できます。また、遠近両用眼鏡では近用視力のチェックも大切(必須)ですが、近用部での立体視機能をチェックする事もお勧めです。私は「3Dテスト」と称して遠見近見と装用値でチェック確認を行っています。

ランダムドット・ステレオグラムには近見での立体視機能をチェック出来る視標が準備されています。紙面の関係でグラフなどが掲載出来ないの

ですが、近見で40秒の視差を確認出来る眼ではPD60mmで作業距離41cm時に0.54mmの前後感覚を見分けられる能力を有します。作業距離を30cm程度にすると0.3mmと極細シャープペンシル芯程度の前後感覚を認識できます。装用値をどのように設定するか、これは眼鏡技術者個人の考え方やお客様の状況などなど複雑な要因が大きく関係しますが、快適な眼鏡を提供する一つの手法として遠見は勿論、適切な加入度設定時の近見立体視機能をチェックされることをお勧めします。

3Dテストの確認

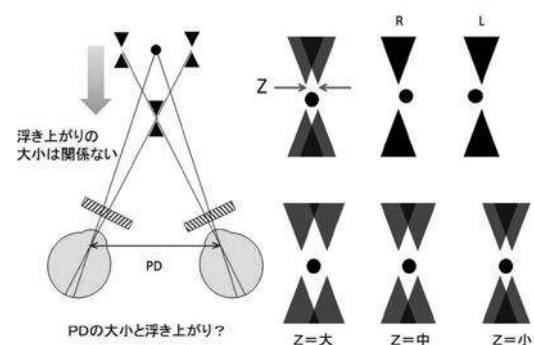


図-6

ランダムドット・ステレオグラムを考案したベラ・ユレシュは2003年に亡くなったようですが、晩年彼は霊長類に両眼立体視機能が与えられた理由を色々と考えていたようです。皆さんはどのようにお考えでしょうか。ともあれ、特別に与えられたこの両眼立体視機能、眼鏡製作に大いに活かそうではありませんか。

まとめ

- 1) 装用値でも立体視機能のチェックを行ってみよう。
- 2) 遠近両用眼鏡は近用部で立体視機能をチェックしてみよう。

次回予告

お店ではよく見えていたのに、自宅で新聞などが「何となく見にくい」といった現象を聞いた方は多いと思います。こうした原因の一つにコントラスト感度の低下が考えられます。コントラストとは何か、眼のコントラスト感度特性を他覚的に調べる最新の機器などの紹介にもチャレンジの予定です。

第 51 回 日本眼光学学会 参加印象記

ワールドオプティカルカレッジ校長 金子 弘

2015 年 9 月 26 日（土）、27 日（日）の 2 日間、JR 岡山駅西口に隣接する岡山コンベンションセンターにて、第 51 回日本眼光学学会が開催されました。会長は、川崎医科大学の長谷部 聡先生。参加者は、眼科医、視能訓練士、レンズメーカー、光学機器メーカー、各地の大学の視覚、光学、物理、心理などの先生や学生が約 420 名で、メガネ関係の参加者は数えるほどしか見当たりませんでした。

発表は、招待講演 1 題、教育セミナー 1 つ、シンポジウム 4 つ、2 回のランチョンセミナーと、一般口演が 41 題で、内容は結構充実していたと思います。発表内容は、眼光学に関して、眼内レンズや白内障、また近視矯正手術、それに使うニューデバイス、新しい立体映像技術など多岐にわたりました。

その中で私が驚いたのは、20 年前に登場してあっという間に眼科の必須機器となった OCT（光干渉断層計）の進歩です。オートレフのようなかたちの器械ですが、前眼部や眼底に光を送り込みその反射光を解析することによって、角膜や網膜の断面をきれいな画像で表示することができます。これまでは比較的粗い画像でしたがそれが一段と鮮明になっただけでなく、より広い範囲の断面をより深く表示できるようになりました。

招待講演は、ボストンの New England College of Optometry の Prof. Jane E. Gwiazda 先生が「近視のレンズ治療：COMET 研究から得られた結果と教訓」と題して講演されました。これは累進屈折力レンズ（PAL）を使ってアメリカで行われた近視の進行予防の結果報告ですが、今回の学会長である長谷部聡先生も、かつて岡山大学で同様の広範囲な検証研究を行われました。日本での結果はちょうど半年前の本年 5 月に岡山のワールドオプティカルカレッジで開催された第 19 回日本眼鏡学会で長谷部先生によって紹介されましたので、今回アメリカの結果はどうだったのかと興味深く聞くことができました。

1997 年から 2010 年まで、2 期にわたって 469 名の近視児童を対象に、単焦点装用群と +2.00D 加入の PAL 装用群の 2 群に分けて近視の進行度合いを比較し、PAL 装用群は単焦点に比べて 3 年間



会場風景

で平均 0.20D ～ 0.28D の近視抑制効果が認められたとのことです。しかし結論としては、PAL の装用は単焦点に比べて統計的には有意差があり、PAL の効果はあるといえますが、抑制できる近視度数はわずかしがなく、個人差も大きいので、お勧めできるほどではない、ということでした。この結論も日本での結論とほぼ同じで、日米ともきっちりした検証をすると、近視進行に対する累進レンズの効果はそれほど大きなものではないという、やや期待外れの結果でした。

その他、通常レンズとブルーカットレンズを装用して PC やタブレット端末を使用した時の調節微動高周波成分を比較した研究がありました。眼内の毛様体筋は疲労すると高周波微動を発生するという仮説のもと、それをオートレフの連続測定で検知することができますが、45 ～ 90 分の PC や iPad 操作では、ブルーカットレンズによる疲労改善効果が認められたとのことです。ただし、個人差が大きく、すべての人にブルーカットレンズが有効だとは言えないとしています。この演題はメガネ技術者に大いに関係するテーマで、実際はいろいろところで、多様な条件下で治験する必要があると思いました。

今回、私自身も久しぶりでしたがツープロイントのねじ止め方法の違いでレンズのひずみにどのような違いがあるか、光弾性で比較する研究結果を発表しました。レンズのひずみをチェックする「光弾性ひずみ計」はメガネを扱う私たちにはなじみ深いです。眼科や視能訓練士の方には珍しかったようです。今後もメガネの地道な研究を続けて、このような学会でも積極的に発表してゆきたいと思いました。



最新の累進眼鏡フィッティング ～ガイドラインをめざして～

日本眼鏡学会 眼鏡調製・機器研究部会
部会長 木方 伸一郎

■ はじめに

日本眼鏡学会の第19回のオープンセミナーが東京の有明にあるTETビルディングにおいて開催されました。会場には140名を超える受講者が集まり、会場からも質問があいつぎ熱心な議論がかわされました。

日本眼鏡学会には、視覚機能・測定、眼鏡レンズ、眼鏡フレーム、眼鏡調製・機器、眼鏡教育・資格、特別、といった6つの研究部会があり、昨年は視覚機能・測定研究部会が「眼鏡学と眼科医療の連携」をテーマにオープンセミナーを開催しましたが、今年は、眼鏡調製・機器研究部会が、「最新の累進眼鏡フィッティング～ガイドラインをめざして～」をテーマとして開催しました。

近年の眼鏡レンズ、特に累進屈折力レンズの製造技術の進歩はめざましく、より“その装用状態に合わせたレンズ”が可能となりました。いわゆるコンマ何ミリまで、オーダーすることができます。しかし、その効果は、適切なフィッティングとその装用状態の正確な計測、さらに、その的確な解析があってこそ発揮できるものです。いわゆる“ビデオ計測システム”が何を計測しているのか、そのより正確な計測のスキルアップ、そして計測データをどうレンズオーダーに生かすべきかについて、フィッティング理論の基礎に立ち返り、考えていくことが大切だと考えます。

これを、今回、10月7日に行われた日本眼鏡学会のオープンセミナーの目的としました。当日は、レンズ研究部会の幹事でもある東京眼鏡専門学校の森峰生先生と大阪の日本眼鏡技術専門学校の吉野勝先生の講演に続き、日本眼鏡技術専門学校の辻一央校長、岡山のワールドオプティカルカレッジの金

子弘校長、キクチ眼鏡専門学校の吉原智先生も加わって、パネルディスカッションを行いました。ここでは、私が感じたポイントをまとめてみました。

■ きちんとあわせたのに・・・

2014年に眼鏡技術者国家資格推進機構の特別委員会が、インターネットを通して実施した「累進眼鏡の使用実態調査報告書」では、累進眼鏡使用者の53.1%が何らかの不満を感じているという報告があります。累進レンズは、連続的に屈折力が変化する、いわゆる「焦点のないレンズ」であるため、横を見たときにボケを感じたり、視線を動かした時の揺れや、歪みを感じることが、どんなに良い設計であっても、完全になくなることはないといえます。しかし、いわゆる個別設計により、その人の度数や装用状態に合わせて作られることにより、この問題が軽減されることが期待されます。

一般に、累進レンズの不満足の原因としては、以下のことが考えられます。

1. 中心視力や明視域の不満足
2. レンズタイプ選択の不適合
3. レイアウトとフィッティング
4. 過大な期待値とレンズの特性の理解（説明）不足
5. 順応できない

1. は、いわゆる「真ん中での見え方の不満足」で、加入度を含め、調製度数による問題です。また、現在はいろいろなタイプの累進レンズがあります。遠近、中近、近々などというように区分されますが、その中でもいろいろな特長をもったレンズがあり、それぞれの場面での「よく見える範囲」がそれぞれ違います。また、急激な度数の変化は、歪みや揺れ

の原因となります。2. は、そういったレンズタイプの選び方が正しかったかという問題です。

さらに、レンズを適切な位置に保持するためのフィッティングや、そのレンズのフィッティングポイントをどこに設定して加工するかによって、同じ度数、タイプであっても、見え方の満足度が違ってきます。これが、3. の問題です。

先にお話したように、累進レンズは、「焦点のないレンズ」であり、オールマイティーでもパーフェクトでもないレンズです。その欠点も良く理解してもらい、過大な期待をもってもらわないことも、不満足を減らすことにつながることはなると思います。これが、4 です。ということは、累進レンズは、誰にでも使いこなせるレンズではなく、どうしても使いこなせない人も、あると考えるべきです。コンサルティングの中で、累進レンズをおすすめできないと判断することも、不満足を減らすことになると思います。

その中で、今回は、フィッティングにテーマを絞ってもう少し解説します。

■ 光学的に望ましいフィッティングとは

フィッティングの要素として、美的、力学的、光学的という3要素がよくあげられます。お客様に、より満足して装用していただくためには、美的要素は非常に大切です。しかし、光学的に許容できる状態でないと、見え方が不満足となつては、本来の目的が達成されません。また、的確な装用状態は快適に維持される必要があります、これが力学的要素となります。これらは、累進レンズに限らず言えることですが、度数が連続的に変化し、それぞれの場面でピントが合う範囲が狭い累進レンズでは特に重要です。

光学的フィッティングの要素としては、代表的なものは、フィッティングポイントの位置、頂間距離、前傾角、そり角などがあります。

いわゆるビデオフィッティングでは、前傾角、そり角、頂間距離が何点何度、何点何ミリといった細かい数値まで測定されますが、その前に、あるべき前傾角、そり角、頂間距離であるかをチェックすることが大切です。頂間距離が変わると、眼に対する度数効果（眼屈折：ocular refraction）が変わってきます。つまり、屈折測定をしたときの頂間距離と

累進レンズを装用するときの頂間距離が変化したときは、度数を換算する必要があります。また、個別設計のレンズでは、頂間距離を入力すれば自動換算しますが、屈折測定が正しい頂間距離で行われていなければ、間違った換算となってしまいます。まっげや頬が障害とならなければ短い頂間距離の方が、限られた視界は広くなります。

前傾角やそり角が大きくなると、レンズに対して視軸に角度がつきますので、眼に対する度数効果（眼屈折：ocular refraction）が変化してしまいます。できるだけレンズ設計者が想定した前傾角やそり角に近づけることが望ましいですが、美的にどうしても求められる場合には、その角度による度数の換算が必要となります。

次に、左右の非対称性について考えます。前傾角が左右少しでも異なると、違和感がでますので、よくチェックする必要があります。頂間距離が左右違つくと、度数や下方視での必要な累進帯の長さが左右異なることとなりますので、顔幅などが非対称の時は難しいですが、頂間距離が、できるだけ左右差のない状態にすることが大切です。

いわゆる「ハーフ PD」は、一般的には顔の鼻陵といわれる鼻の中心から瞳孔の中心までの距離をいい、左右異なるときはそれを考慮してフィッティングポイントの位置を決めます。ただし、最終的には、フィッティングした状態のフレームのブリッジの中心からの設定となります。ヨーロッパ的な鼻の場合は、フレームのブリッジ中心も鼻陵の中心もおのずから一致しますが、眼と眼の間の鼻が高くないアジア的な顔で、特に鼻がまっすぐでない場合は、必ずしも一致した位置が美的に良いとも限りませんので、まずフィッティングをして、その状態でのフレームのブリッジ中心から瞳孔中心からの距離を考慮して設定します。

上下 PD については、まず、何を中心線、水平ラインとするかが問題です。眉のラインと目の水平ライン、顔の垂直線に対して直角なラインは、左右対称なら互いに平行となるはずですが、人間の顔では、そうはいかないのが普通です。ではどうするかですが、累進レンズの場合は、下方視をして見る近用部が限られています。上下 PD を設定した場合には、理論的には下方視して左右とも近用部中心を視軸が通るためには、累進帯の長さを左右違つ長さにする

必要があります。また、今までの、上下 PD がないとして調製している場合には、その時と比較して上下プリズムがつくことになります。まず、瞳孔中心を結ぶラインを水平として上下 PD をつけないようにフィッティングして、どうしても美的におかしい場合のみ考慮していくほうが、不満が少ないと思われます。

■ その人の個性をつかむ

例えば、「あごがあがる」「顔が傾く（右が上がる、右が前にでる）」など視線の使い方にくせがある場合にどうするかは、難しい問題です。「くせ」を直すか「くせ」にあわせるかどちらがいいかは、一概にいえませんが、まず、くせがあることを把握するのがスタートラインです。

■ 軽くてずれないメガネだからこそその問題点 最近、軽くてずれないフレームが多く普及して

います。ずれないということは、的確な位置に保持できる点ではいいのですが、一方で的確な位置でなくても装用できてしまうので、正しい位置に装用してもらうように注意することが必要です。

■ おわりに

日本眼鏡学会では、2014 年の日本眼鏡学会年次セミナーにおいて、「ビデオ計測システムの活用法」と題して、メーカーによるシステムの概要の報告を中心にしたシンポジウムを行いました。2015 年は、春の年次セミナーでのシンポジウムに続いて、「最新の累進眼鏡のフィッティング」と題したオープンセミナーを実施しました。人の顔の形や視線の使い方は千差万別です。マニュアルのような画一的な方法を会得するだけでなく、その人の標準との違いを、的確に把握し、総合的に、その人にとっての最適なフィッティングをめざしていくことが必要と考えます。

金井昭雄国際部長が APCO の功労人メンバー賞受賞

10 月 8 日にマレーシアで行われた APCO（アジア太平洋オプトメトリー会議）で当協会の副会長国際部長であり、前 APCO 会長の金井昭雄氏に対して、APCO 功労人メンバーへの承認の議案について満場一致で可決されました。

この功労人メンバー（Distinguished Person Member）は、DR.Claro Cinco（フィリピン）と Dr.Damien Smith（オーストラリア）について歴代 3 人目です。この賞は、大会初日の夕方に Saloma Bistro and Theatre Restaurant で開催された Gala Dinner で APCO 会長より授与されました。これは、APCO への長年の貢献、国外では長年の各種難民への視力ケアの活動に対して国連 UNHCR から 2006 年にナンセン難民賞が授与されたことなど、さらに国内ではビジョンケア活動



APCO 会長より金井氏に功労人メンバー賞の盾が授与された（上）、盾（左）

に対する各種受賞などを評価して、この賞が授与されました。この賞の受賞は、日本の眼鏡業界においても大変誇らしいことです。

（国際部 関真司）
（APCO の報告は 19 ページ）

● 新聞などへ掲載された認定眼鏡士のPR ●

長野県支部

10月16日付
信濃毎日新聞



島根県支部

9月30日付、山陰中央新報
10月11日付、りびえ〜



秋田県支部

10月10日付
秋田魁新聞



山梨県支部

10月1日付
山梨日々新聞



和歌山県支部

10月10日付、読売新聞和歌山版
10月7日〜10日
和歌山放送・ラジオスポット広告



ラジオスポット広告詳細／放送日時・回数：10/7：2回、10/8：2回、10/9：3回、10/10：2回 内容／（女性の声で）10月10日は「目の愛護デー」です。メガネ選びは県内に68名、公益社団法人日本眼鏡技術者協会認定の「認定眼鏡士」のいるお店で。確かな知識と技術を身につけたメガネのスペシャリスト「認定眼鏡士」のいるお店なら安心です。

兵庫県支部

10月1日付、神戸新聞



●山田稔 和歌山県支部長が「目の愛護デー」でラジオ出演

和歌山放送ラジオ／10.9放送／番組「しそまるの全開！金曜日」内で約13分／パーソナリティ：桂枝曾丸（しそまる）さん、中川智美さん

中川アナウンサーのリードで話が始まり、メガネ歴30年の枝曾丸さんが山田支部長に問いかけていくという形で進みました。

初めは当協会のことや認定眼鏡士について、山田支部長は「広く社会に貢献しようという団体でメガネ関連では唯一の公益法人です。認定眼鏡士になるには眼鏡専門学校卒業または試験合格で、登録の有効期限は3年間で、その間に講習を3回受けることが決められている」と話しました。

枝曾丸さんは山田支部長の話を聞きながら、「メガネはいい加減に作ってはいけないもの」だと自身の体験を面白いエピソードを交え、囃家さんらしくテンポよくメガネの大切さ、また認定眼鏡士は最新の知識や技術を持っていることなどを聴取者が分かりやすいように訴えていました。山田支部長は「行きつけのメガネ屋さんに行き行ってフィッティングをしてもらうことも大切」、さらに「認定眼鏡士が在籍しています」のステッカーを目印にしてほしいとも伝えました。



左から山田支部長、中川知美さん、桂枝曾丸さん

●新聞に記事掲載●

奈良県支部

9月15日付、奈良新聞

9月2日に開かれた生涯教育講習の様子が奈良新聞に掲載されました。記事の中で森本勝支部長は「技術や知識を最新の状態に保ち、最適な眼鏡を提供できれば」と述べています。



●ポスター作製●

鹿児島

県支部（岡野和典支部長）は、標語ポスターを支部会員に配布。9月10日〜10月15日に店頭に掲示しました。岡野支部長からは、「目の愛護デーと標語の周知、会員意識向上になったと思う」と報告をいただきました。



「目の愛護デー・メガネの日」関連のイベント

11月中旬までにいただいたご報告です

神奈川

県支部（小野明夫支部長）は、メガネの日の啓蒙と認定眼鏡士のPRを目的にしたイベント「10月1日はメガネの日」を10月1日横浜駅東口・コミュニティスペースで実施しました。協賛は、神奈川県眼鏡協会、KGK 事業部、HOYA、東海光学、シャルマン、青山眼鏡。今年で3回目となり、イベントも浸透してきており、昨年メガネの調整をしてもらい快適になったのでお礼を言いたくて来たという方もいらっしたそうです。メガネの相談・調整コーナーでは、10名以上の認定眼鏡士が午前10時から午後6時まで途切れることなく大勢の方々に対応。調整・クリーニングの終わった方には認定眼鏡士のリーフレットと視力表をお渡しし、300セットすべて配布しました。また、メーカー協力のもとレンズの紹介や実演、メガネフレームでは鯖江の物作りや子供用のメガネコーナーも設置。さらに（一社）福井県眼鏡協会公認・めがね大使「キューティーパイ」のトークショーや歌で盛り上げたということです。

小野支部長からは、「我々がもっと消費者にメガネの大切さ、重要性を訴えていかないとだめだ」と感じたということで、今後「このような草の根の活動がやがて大きなうねりとなり、業界に浸透していくことを期待したい」と報告をいただきました。



大阪

府支部（亀井正美支部長）は、（一社）大阪府眼科医会の主催で毎年行われている「目のすべて展」に協賛。10月11、12日、大阪市北区のブリーゼプラザで行われ、600名弱の来場者がありました。今回は、「加齢と眼鏡」と題してインディビジュアルレンズやフィッティングの重要性などの講演会。また、遮光眼鏡や累進眼鏡とロービジョンに対応した拡大鏡サンプルを持ち込んでの紹介や説明、大阪眼鏡専門小売協同組合所属の遮光眼鏡取扱店を紹介しました。さらに「メガネがつなぐみんなのまち！」と題した絵画コンクールを実施、55点の作品が集まり120名余りの絵画作品への投票で優秀作品が選ばれました。



徳島

県支部（竹田保世支部長）は、徳島県めがね商連合会主催の第17回「メガネ供養」に支部として協賛。10月1日、鳴門市の葛城神社で執り行ないました。

供養祭には、葛城神社内のめがね塚前に設置した祭壇に日常の営業でお客様から預かった不用メガネ500本を供養。不用メガネで使えるものは、老眼鏡レンズに交換した上でタイの農山村へ寄贈されます。なお、メガネ供養祭および寄贈について10月2日の徳島新聞に掲載されました。



熊本

県支部（山角邦雄支部長）は、10月1日、熊本市内の手取菅原神社で「メガネ供養祭」を開きました（熊本県眼鏡商組合協賛）。当日は、会員10名のほか計24人が参加となりました。

供養祭には、会員の皆さんに呼びかけて集めた古メガネ60本を分解しメタル素材を持参。祝詞と玉串を奉納し、供養するとともに生業に感謝しました。



東京 都支部（片山敬三支部長）は、10月1日、不忍池・弁天堂で行われた東京眼鏡販売店協組が主催の「第3回めがね供養会」に協賛。集まった不要メガネは昨年を上回り1,144本となりました。供養前には、弁天堂を訪れた人に対し、販売店協組加盟店リストおよびオリジナルメガネクロス、付箋、当協会の視力表およびミニカレンダー、リーフレットを200セット配布。なお、今回も（一社）福井県眼鏡協会公認・めがね大使「キューティーパイ」も参加しました。



宮崎 県支部（山口清一支部長）は、NPO法人「スローライフ宮崎」主催で、10月10日生目神社で行われた「メガネ供養および発展途上国へのメガネの寄贈」に参加・協力しました。今回は、スローライフ宮崎に合計1,610本（宮崎県支部会員に呼びかけて集めた200本を含む）が集まり、その中で使用できる874本のメガネを宮崎県ボランティア協会へ、さらに日本ボランティア協会を通じ発展途上国に贈られます。



福井 県支部（赤松賢治支部長）は、11月14日福井市のラブリーパートナー・エルパ2階で、（公財）福井県アイバンク、福井県眼科医会などの主催する「目の愛護デー眼科無料検診」事業に協賛。約600枚のチラシ、リーフレット、視力表、ティッシュなどを配布。支部からは6名の理事が会場にて、メガネの洗浄、パッド交換、調整などを行ったほか、当協会のPRもしました。イベントは、昨年以上の集客だったとのこと報告をいただいています。



●認定眼鏡士として協力・参加されています●

京都 府支部（鈴木利夫支部長）では、10月4日、京都市のゼスト御池地下街で京都府眼科医会の主催する。「忘れていませんか 目の健康」に支部の認定眼鏡士4名が協力し、メガネの無料相談に応じました。505名が来場、31名がメガネの無料相談に訪れたそうです。

愛媛 県支部（田部健二支部長）は、愛媛県の依頼により愛媛県が主催、県医師会・薬剤師会などが協賛する目の愛護デーポスター（「年に一度は目の健診を！症状が出にくい病気をチェックしてもらおう！～目の健診はお近くの眼科専門医で～」の標語）に当協会愛媛県支部の名前を掲載しました。ポスターは、県庁および保健所に掲示されたということです。

高知 県支部（楠瀬剛志支部長）は、10月4日、高知市の中央公園で行われた高知眼鏡商組合・県眼科医会主催の「メガネのチェック＆チェック」に協力、組合員であり認定眼鏡士の10人が「メガネクリニック」コーナーで対応にあたりました。メガネのチェック＆チェックには123人が相談などに訪れたということです。



理事会 報告

日 時／平成27年10月21日(水)
午後2～4時
会 場／ニューオーサカホテル
出 席／理事総数25名中、出席21名、
欠席4名。監事2名中、出席2名



理事会風景



あいさつする津田会長

津田会長は「眼鏡データベースによれば2014年の眼鏡小売業界の売上は4008億円で対前年2.2%減、2014年4月からの消費税+3%を加味すれば約5%の減であり、あまり芳しくない。アベノミクスも行き詰まりを見せ、中国経済の後退によるデフレの懸念もあるが、我々業界も何とかがんばっていかなければならない。推進機構の活動は、厚労省との活動がなかなか進まない中で、ほかの複数省庁との折衝の方向にいく。推進機構ができた頃は民主党政権で、当時は政権交代もあり厚労省の対応も前向きに変わってきたかなと思わせたが、自民党安定政権になり厚労省も昔の体質に戻ってなかなか我々のために動いてくれない。

経産省の中にはヘルスケア産業課があり、医療費の削減が国民の健康生活に支障をきたすことのないよう健康寿命の延長を図ろうとしている。

従って、この課でヘルスケアにちなんでビジョンケアの資格の確立に取り組んだらどうか。もう一つは文科省で、専門学校の卒業生に対して専門士という称号があるが、もっと細分化して例えば眼鏡専門士、光学専門士のようなものを作れないかと考えている。このように推進機構では折衝する省庁を複数化しようとしており、これは9月17日の推進機構臨時幹事会で従来の厚労省中心の活動から少し幅を広げて活動したいという方向性を確認している」と述べた。



説明する豊福総務部長

【審議事項】

議題1. 平成27年度上期事業ならびに決算報告

① 平成27年度上期事業／豊福総務部長が資料に基づき、平成27年度上期の事業内容を詳細に報告 ② 平成27年度上期教育事業／木方教育部長が資料に基づき平成27年度教育事業の詳細を報告 ③ 平成27年度上期決算／中島財務部長が資料に基づき平成27年度上期決算について詳細に報告 ④ 監査／岡野監事が資料に基づき監査結果を報告。平成27年度上期事業報告ならびに上期決算報告全般の質疑に入った。

(意見) 半年で会員が200名くらい減っている。活性化の検討部会はあるのか。もっと問題意識を持つべきだ。(回答) 組織活性化特別委員会があるが、青年部・女性部の活動が中心。新入会員は学校卒業生とSS認定試験合格者だけなので減少しており、会費未納で資格を失う方のほうが多い。この歯止めは高齢化社会の更なる進展から非常に難しい。今後は組合に所属しない量販店、チェーン店の方々も認定眼鏡士の資格をとって当協会に入っていただくようにすることが解決方法ではないかと考えている。

(意見) 教育事業は会員が主体だが、会員を増やすためには会員になる前の段階の方々にも、もっとオープンに受講料も安く受講できるように工夫すべきでは。(回答) 会員外の認定眼鏡士は日本オプトメトリック協会会員が多く、キクチ眼鏡専門学校の講習会を受講されている。会員外受講料の対象とはなっていないので、それが大きなネックになっているとは思えない。



説明する木方教育部長



説明する中島財務部長



報告する岡野監事



報告する岡本理事

（意見）認定眼鏡士ではない会員はおられるのか。（回答）認定眼鏡士・会員：認定眼鏡士・非会員の比率は 75：25 で、非会員の比率は増加傾向。

（意見）全体で考えることも重要だが、支部で考えていくことも重要。（回答）きめ細かい働きかけで会員の意識は高まり、各支部・ブロックでお力添えをいただければ会員減少に歯止めがかかると思うのでよろしくお願いします。

平成 27 年度上期事業・決算は全員の拍手で承認した。



報告する西村理事

【報告事項】

（１）眼鏡技術者国家資格推進機構の最近の動き／岡本理事（推進機構代表幹事代行）が資料に基づき次の通り報告した。資格はもらえるものと思っている人が多いが、資格は自分達で勝ち取るものとの意識が必要。色々な方々と話をしている中で、眼鏡業界の就労人数 4 万人とすれば少なくとも 2 万人は今の時点で認定眼鏡士であるべきと言われるが、現状はまだ少なく、しかも減少している。今後は経産省も念頭に入れるので「眼鏡技術者に国家資格制度を導入する意義について」の文章を改定した。従来は専門的な言葉が多くて分かりにくいとの声があったが、業界以外の人にも分かりやすくした。また、自分達にどういうメリットがあるかということばかりを言う人が多いが、理念が一番大事である。以前の要望書は厚労省向けだったので、医師と連動してという表現になっていたが、改訂ではこれをシンプルな表現にした。要望内容などについては変わっていない。現在一番時間が取られているのは代議士とのコンタクトであるが、現在コンタクトが取れているのは衆議院で 24 名、参議院で 4 名の代議士。その中でも十分に内容を伝えることができていたのは 7 名程度。これに対し、最近国家資格になった臨床心理士の場合にはコンタクトした代議士が 60 名以上、賛同していただいて立ち上げた議員連盟が 40 名ということで、我々はもっと活動を広げていく必要がある。



報告する辻広報部長

（２）日本眼鏡士連盟の活動と収支状況について／西村理事（日本眼鏡士連盟理事長）が資料に基づき報告した。



報告する平岩理事

（３）平成 27 年度 PR 事業について／辻広報部長が口頭で次の通り報告した。第 148 号の会報を 40 ページの 50 周年記念特集号として発行。次の 12 月号では内田先生に眼鏡学の連載をしていただく。また木方教育部長にはフィッシングについて寄稿いただく。普及啓蒙事業には、ミニカレンダーを作成し 9 月に送付。ステッカー 2 枚とリーフレット 25 部を認定眼鏡士登録証に同封して送る。ホームページの維持・改善については、全体のリニューアルを計画している。ここでプロジェクトリーダーの福田吉美氏（大阪府支部代議員）より経過報告があった。



報告する金井国際部長

（意見）ホームページは会員用か一般用か。一般用には分かりやすくするために絵を多くすべきではないか。（回答）現ホームページと同様に両方である。絵も含めて具体的なアイデアがあれば 12 月末までに事務局までお願いします。

（４）組織活性化特別委員会報告／平岩理事が口頭で報告。今年度は並木先生に「オシャレを考えてみよう」のタイトルで青年・女性部主催の認定講習会を開催する。ピンバッジ作製は、次回の理事会でサンプルを示してご了解をいただき進めたい。組織の活性化には内部の活性化と外部の活性化がある。内部は各支部での青年・女性層の登用を一段と推進していただきたい。外部的な活性化は、これから認定眼鏡士を目指す人たちのために、講習会の受講料をもっと安くして勉強をする後押しをすることが、会員数の増加につながるのではないかと。



説明する福田 HP プロジェクトリーダー

（５）その他／①創立 50 周年記念事業収支報告 ②「認定眼鏡士®」登録商標の権利行使について／豊福総務部長が報告 ③ 国際部報告／金井国際部長が、WCO 大会および APOC 大会について報告（18～19 ページ）④ 日眼協の大規模災害支援機構構築委員会報告 ⑤ 会員数ならびに認定眼鏡士登録者数／会員数 5,964 人、認定眼鏡士登録者 7,127 人（平成 27 年 9 月末現在）など



WCO (世界オプトメトリー・コンGRESS) 参加報告

国際部 林 光久



VOSH (オプトメトリーボランティア団体) のメンバーと

二年に一度開催される WCO の総会は、今回から世界オプトメトリー・コンGRESS (World Congress of Optometry) と銘打って、8月14日から16日までの会期で、教育的プログラムを大幅に拡張して大々的に開催された。コロンビア・オプトメトリー協会との共催で行われた本大会は、南米のコロンビア共和国西部にあるアンティオキア県の県都メデジン (メデリンともいう) 市内のプラザ・マヨール会議展示場が会場だった。メデジンはコロンビアの首都ボゴタに次ぐ第二の都市で、市内のあちこちで新しい建物や道路の建設が進んでいるが、その一方で盆地であるメデジンの中心から周辺に向かう斜面には貧しい家々が立ち並んでいた。「ずっと春の続く都市」ともいわれるメデジンは、標高 1,500 m の盆地で気温もほぼ一年中安定している (18 ~ 28℃)。

コンGRESSの前日に開催されたプレジデンシャル・フォーラムでは、各国からの協会や学校の代表、業界からのリーダーたち、また保健衛生に関わる人、等々が集まり、WCO が WHO (世界保健機構) と共に推進している Vision2020 運動に向けての WHO の眼の健康に関する行動計画 2014-2019 において如何に効果的に貢献できるか、について議論された。その結果は「メデジン宣言」として公表されることになっている。

コンGRESSのオープニングセレモニーは、コロンビアのオプトメトリー協会の会長、WCO 会長の Dr. スーザン・クーパー、コロンビアの厚生・保健関連の政治家などの挨拶ではじまった。続いて、つい先日亡くなったアイケアの功労者 Dr. ブライアン・ホールデンを偲んで、スピーチ。もう一人、やはり最近亡くなったコロンビアにおけるオプトメトリーの功労者オットー・エストラダ氏。この2人のため、黙祷。続けて無数の蝶が会場に放たれた。このあと会場内を、蝶たちは飛び回っていた。これがコロンビア式の追悼の仕方なのだろうか。そう言

えば、入場の際に細い黒いリボンにピンを通したものを渡されて、胸に着けるように言われたが、考えてみるとこれが喪章だったのだろう。

そして、3日間にわたるコンGRESSが開幕した。

今回は史上初の世界オプトメトリー・コンGRESSということもあって、その講習会の講座数も180講を数え、平行してメーカーの展示も行われた。全体的な参加者は3,000人を超え、国外からの参加者も1,000名近くいたという。

講習会の内容は多岐にわたり、クリニックの運営的なもの、オプトメトリーにおける最新技術の解説、臨床に関する内容のものも、コンタクトレンズ、ロービジョン、ビジョントレーニング、さらには近視の抑制から糖尿病網膜症等。その合間に、WCO の取り組みについての講習会もあり、WCO におけるオプトメトリーの定義、さらにそれを発展させて完成された「なぜ、オプトメトリーなのか」(Why Optometry?) という冊子が紹介された。また、もうひとつの冊子、「世界的技術に基づくオプトメトリー業務範囲のモデル」(A Global Competency-Based Model of Scope of Practice in Optometry) は、地球上の国や地域によって異なるオプトメトリーの業務範囲をそのレベルによって分類し、それぞれのレベルについて詳細な項目をまとめた冊子。いずれも英語版ではあるが、インターネットの WCO ホームページ <http://www.worldoptometry.org> で入手可能。

3日目には、夕方から各国からの代表者が集まる一般代表者会議 (GDM = General Delegates Meeting) が開催された。この会議を境に、Dr. スーザン・クーパー (カナダ) が退任し、ナイジェリアの女性、Dr. ウダック・ウドムが新会長に就任した。これで3代続けて女性が WCO の会長になった。また次期会長には、カナダの Dr. スコット・マンドルが選任された。

恒例の国際的に貢献したオプトメトリスト

の受賞の発表があった。ジョージ・ウー教授は50年以上に亘る功績が評価され「特別貢献賞」(Distinguished Service Award)を受賞した。ウー教授は、ハイテクな補装具を必要とする患者への対応や、ロービジョンやコントラスト感度の分野における研究で多大な貢献をしている。

「インターナショナル・オプトメトリスト賞」は以下の3名に贈られた。2008年にアフリカのマラウィにオプトメトリー・スクールを創立させたDr. アラン・ジョーンズ、インドやパキスタンのオプトメトリー教育や診療に貢献しているDr. シェー

ザッド・ナルー、そして、国際的に有名な教育者であり特に南米のオプトメトリー・ケアが行き届いていない地域での診療に貢献しているDr. ビナ・パテル。今後の予定がいくつか発表された。WCOの本部は、2008年からロンドンにあったが、2015年秋に、AOAの本部のある米国ミズーリ州のセントルイスに移転することになっている。

次回、第2回世界オプトメトリー・コンGRESSは、2017年9月11日～13日の会期で、インドのハイデラバードで開催される。

第20回 アジア太平洋オプトメトリー大会・会議 (マレーシア)

国際部 関 真司



写真2 (APCO 代表者会議)

1978年以来2年に1回開催される Asia Pacific Optometric Congress (APOC; アジア太平洋オプトメトリー大会)は、マレーシアのクアラルンプール郊外のMid ValleyのGardens Hotel & Residencesで、10月9日から11日まで「目の健康増進」のテーマで開催されました。マレーシアは、アジア太平洋地域で早い時期に眼鏡法が1991年に制定されて以来、長期に渡りこの法制化制度が十分に生かされず、オプトメトリーへの脱皮がうまく行われていませんでした。法律制定時は、国立のUniversity Kebangsaan Malaysiaの1校のみでオプトメトリー教育が行われていましたが、オプトメトリー教育を提供する学科も現在8校の大学に増え、大学院レベルのオプトメトリー教育も整備され、眼の外眼部への薬物使用までのオプトメトリーサービスの拡大を図っています。このような背景のマレーシアで、第

20回 APOC 大会が行われ、43 演題・55 ポスター発表があり、非常に充実した大会でした。日本

から東京眼鏡専門学校のエ先生が「ハンフリス法による自覚屈折測定と両眼開放オートレフの比較」のテーマで発表しました(写真1)。

この大会を機に、マレーシアの眼鏡業務内容も大いに変わり向上していくと感じました。この会を成功に導いた大きな要因の一つは、日本の主な眼鏡関係会社から寛大なサポートによっていると思います。この大会の詳細な報告は、<http://www.asiapacificoptometry.org/> APCO ホームページを参照してください。

大会前日に同じホテルで開催された APCO (アジア太平洋オプトメトリー会議)での全体代表者会議も開催され、12 ほどの議題が審議されました(写真2)。金井氏と関は日本眼鏡技術者協会の国際部から日本代表として会議に参加しました。特に、今後の APCO 運営をより円滑にするため、会議のルールの変更が行われました。会議では次期(2016-2017 年)役員改選が行われ、日本からは関真司が選ばれました。なお、金井昭雄当協会副会長が APCO の功労人メンバー賞を受賞しました(12 ページ参照)。

次回の第21回 APOC は、2017 年 9 月 11 日から 13 日までインドの Hyderabad で開催されます。日本からのより多くの参加者を期待します。



写真1 (日本から林先生の発表)

組織活性化特別委員会

青年部・女性部主催の認定講習会が、11月5日、東京眼鏡専門学校で開催、24名が受講しました。テーマは「オシャレを考えてみましょう」で、講師は並木豊明氏です。並木先生は、TBSのADやミキモト真珠での制作、三宅一生氏、山本耀司氏のパリコレ用のアイウエアやサングラスの制作を経て、現在は原宿の眼鏡店・株式会社ロイドの代表取締役社長をされています。

まず、メガネ店と出会い8年の修行を経て独立、東京コレクションからの発注のエピソード、一方子供用メガネの専門店も作るなど、多彩な経験を紹介。続いてアパレル・コレクションのお話。さらに服などのコーディネートについては、化粧、髪型だけでなく「検眼・フィッティングはできて当たり前だが、ファッションもできて当たり前になってほしい」「接客の目配せなどができるベルキャプテン役（采配役）が店にいてもいいのではないかと」アドバイスがありました。

続いて、事前に受講者に送られた宿題（イメージ

から絵を描く）を基に話を進め「フレームのラフが描ける

ぐらいが良い。こんなメガネない？などメーカーとやり取りができる」「絵の陰影のつけ方など丁寧に描ける人はお客様にも丁寧に説明ができる」と感性の大切さをお話くださいました。お客様を知ることの大切さでは、お客様のカバンの趣味などから勧めるメガネを選んだり、その理由を説明することも必要ということでした。最後にメガネのコーディネートについて、メガネのデザインをイメージや感性、好奇心を持った目で見たり、発想していくこと。そして、提案できる商品は必要でメーカーと相談したり、買替え周期を変えられるようにオシャレを提案するなどしてくださいと話されました。

2月には愛知、大阪でも講習会が開かれますので、同封の申込書でお申し込みください。

（青年部・女性部 杉本佳菜子女性部長記）

編集後記

かねてから指向しておりました、誌上眼鏡学のページを本号から掲載することになりました。眼鏡学校を卒業され、今、正に現場で切磋琢磨されている認定眼鏡士の方々に標準を合わせて、本協会講師の内田先生に連載してご執筆いただきますようお願いいたしました。

次に第19回日本眼鏡学会のシンポジウム並びに評議委員会で問題視されました遠近両用メガネのフィッティングについて、木方部長にご執筆頂きました。

本協会の動向はもとより、眼鏡学校・眼鏡学会に視線を合わせて編集してまいります。

私たちは生きがいや喜びを求めて生きています。日々の仕事や活動の目的は幸福の実現にあります。人生の成り立ちを改善するには、自分の姿を客観的に見つめ直すことこそ、最も必要ではないでしょうか。

※今年も慌ただしく年の瀬を迎えました。

過ぎゆく日々の速さに驚かされます。

来年はどんな年でしょうか、

静かな節目を迎え、

冷たさの中に潤いを与えるように、

艶やかな表情で咲く名も知れぬ花に、

来る年への期する願いを込める。（戦）

2016年度の更新の方にステッカーとリーフレットをお送りします

来年、認定眼鏡士の更新をされる方に、ステッカー2枚とリーフレット25部をお送りします。送付は、更新を完了された方へお送りする認定眼鏡士登録証に同封させていただきます。



●事務局より 年末年始は12月29日～1月3日を休業日とさせていただきます。

日本眼鏡士連盟 事務所移転のお知らせ

日本眼鏡士連盟は、1月4日から下記に事務所を移転します。
〒103-0027 東京都中央区日本橋3-3-5 日東ビル6F
電話 03-5203-1661 FAX03-5203-1663